会　議　録

1　会議名

令和３年度第１回小林古径記念美術館運営委員会

2　議題（公開・非公開の別）

〔報告事項〕

⑴　開館までの経過報告及び令和２年度の事業結果について（公開）

⑵　令和３年度の事業内容について（公開）

〔協議事項〕

⑶　令和４年度以降の事業計画について（非公開）

3　開催日時

令和３年７月２８日（水）午後２時００分から

4　開催場所

小林古径邸　画室

5　傍聴人の数

０人

6　非公開の理由

議題⑶については、会議公開制度の条例第７条第４号「意思形成過程情報」に該当するため、非公開。

7　出席した者（傍聴人を除く）氏名（敬称略）

・委　員：髙橋信雄（委員長）、五十嵐史帆（副委員長）、大塚啓、川崎日香浬、野田栄美子

・事務局：早川教育長、宮崎館長、笹川副館長、市川主任学芸員、伊藤学芸員、小川学芸員

8　発言の内容

（あいさつ）

（市川主任）：会議に先立ち、早川教育長より小林古径記念美術館運営委員の委嘱状の交付を行う。

（委嘱状の交付）

（市川主任）：早川教育長からあいさつを申し上げる。

（早川教育長）：オリンピックが連日報道され日本勢の活躍が目立つ一方、北海道と沖縄で世界遺産の登録という嬉しい話があった。このようにスポーツだけでなく、芸術文化が人々に勇気を与え、将来の日本を形作る原動力になってくるだろう。当館は昨年 10 月に開館して以来、おかげさまで大勢の方々からご来館いただき、展覧会だけでなく教育普及事業を始め、いろいろなイベントを通して皆様から愛される美術館を目指しスタートした。最近では、作品を収集・展示するだけではなく、出張講座や出前授業、オンラインによる鑑賞などの可能性を探っているところである。また、庭園ライトアップやキャンドルナイト等のイベントは好評であった。今の時代は SNS 等で発信すると非常に大きな反響がある。従来の集客とはまた違った形で様々な方法を考えていきたい。当館の発展と芸術分野の振興、美術教育の貢献について、皆様方からそれぞれのお立場

で忌憚のないご意見を頂戴し、今後の運営に生かしていきたいと考えている。

（事務局および委員自己紹介）

（市川主任）：委員長、副委員長の選出をお願いしたい。選出については、小林古径記念美術館運営委員会設置要綱第４条で委員の互選で定めるとなっている。

（五十嵐委員）：事務局案でお願いしたい。

（市川主任）：事務局案としては、委員長には髙橋信雄委員、副委員長には五十嵐史帆委員を案としてお示ししたいが、いかがか。

（同意多数）

（市川主任）：それでは委員長に髙橋信雄委員、副委員長は五十嵐史帆委員に決定した。それでは、髙橋委員長には、これからの議事進行をお願いしたい。

⑴ 報告事項「開館までの経過報告及び令和２年度の事業結果について」（公開）

（笹川副館長が資料にもとづき説明）

（宮崎館長）：資料にはなかったが、美術館の役割として、上越妙高駅の柴田長俊の作品のクリーニングなど市内の作品の調査や管理のアドバイスを行っている。美術館の中にとどまらず、上越市にある作品について目をかけて管理していくことも大切な仕事である。上越市唯一の美術館で、専門の学芸員がいるからこそできることであり、美術館活動の柱の一つにしていきたい。また、開館に伴った新しい取り組みとして、美術館のFacebook ページを立ち上げ、発信をしている。

（大塚委員）：新しくリニューアルしてから１年もたっていない。この短期間にいろんなことを精力的にやっている印象がある。令和２年度途中で開館したが、休館前と比べ来館者の増減はあったか。

（笹川副館長）：オープン前は、新型コロナウイルスが蔓延していない時期だったため、実数としては以前より少なくなっている。令和２年度の開館記念展に関しては、目標を１万人に設定し、達成している。他の施設の利用者数、入館者数についても例年に比べ 5～7 割減との報告もあるが、それに比べると多いほうだったのではないか。

（髙橋委員長）：目標入館者１万人というのは、有料入館者か、無料を含めたすべての入館者数か。

（宮崎館長）：有料、無料を含めたすべての入館者である。

（髙橋委員長）：コロナ禍の影響で、入館者に対して来館者名簿で居住地等を記入してもらっていると思うが、意外と広範囲からきているという感触が得られたのではないか。来館者がどこからきているのかというのは、データとしてまとめておくのがいいと思う。

（宮崎館長）：開館当時は県内、市内の来館者が多かった。相変わらずどんな状況下でも、東京・関西から必ず何人かは来館している。来館者のデータは次回の委員会でお示ししたい。

（髙橋委員長）：どこから来館者が来ているのかが重要なのは、ここが上越市立の美術館ではあるが、上越市民のためだけの美術館ではないからである。これは重要なことで、「小林古径」という名前がついている以上、全国にいる古径ファンの期待に応えなければならない。この美術館は、作品だけでなく、古径邸や画室など、古径が感じられる場所がある。小さい美術館だが、内容が充実していることをどう発信していくのかを考える事、それが全国に向けた上越の発信につながると思う。

（髙橋委員長）：「今回（令和２年度）は高校生の入館料を無料にしたら通常より高校生の来館が多かった」とあったが、いつも無料にすればいい。なぜ無料ではないのか。無料にしたら来るのであれば無料にすればいい。

（宮崎館長）：博物館法では「無料で公開することを原則とする。但し、館の事業に必要な料金は徴

収することができる」とある。上越市の他の施設との整合性や、条例上の問題もあり、完全に無料にするところに至っていない。上越市が「18 歳までの途切れのない教育」をうたっていることもあり、いずれは高校進学の有無にかかわらず、相応する年齢まで（18 歳まで）は無料にできればと考えている。この件に関しては委員のみなさんに意見をお聞きしたいと思っている。

（髙橋委員長）：高校生にとって、「お金がかかるから美術館に行けない」ということはないのか。

（宮崎館長）：例を挙げれば、高校で教員が授業で「美術館見学に行きたい」と思っても、各家庭から「美術館入館料」として料金を別に集金しないといけない。無料になれば、学校の先生が企画さえしてくれれば、歩いて来館できる高校が多くある。それが令和 2 年度の展覧会の「高校生無料」の試みで明らかになった。

（髙橋委員長）：無料にすればいい。子どもたちにどんどん見せたらいい。

（宮崎館長）：小さい時に見せるというのが一番いい。高校生以上、20 歳代、30 歳代の入館者数が一番落ち込む。そこをなるべくならしていきたいとなると、やはり、高校生の時から美術館に来てほしいと思っている。

（髙橋委員長）：公立美術館の役割として、子どもたちに見せることがやるべきことだと思う。

（宮崎館長）：一度学校単位で美術館に来館すれば、それが恒例になっていくことも往々にしてある。美術館も、隣の博物館も無料にすれば、午前中に 2 つの施設を回るようなこともできるだろう。

（髙橋委員長）：お金を集めることが大変だとか、そういう問題ではないと思う。市は大変なお金を投資したのだから、それが入館料として戻ってくるのではなく、「教育」として戻ってくることが大事である。

（宮崎館長）：例えば、歴史博物館では冬に「昔のくらし展」として、小学校の社会の単元に登場するものをテーマとした展覧会を毎年やっている。それは上越市内の小学生だけでなく、妙高市からも毎年 4 校来る。ただ、妙高市は有料になってしまう。美術館開館を機に、他の市内施設の凸凹をならしていくことができたらいいと思っている。

（髙橋委員長）：運営委員会のなかで、どうやったら子どもの入館料無料を実現できるのか考えたい。上越にきちんとした美術館、博物館があって、見学・体験しないまま大人になって、市外に出て行ったときに、上越という地に何があったのかわからないという事になる。子どもにしっかりと上越市にある宝を見せていくこと、それこそが大事なことだ。

（川崎委員）：学校の授業として団体で入館する、という話があったが、個人の入館者を増やす試みとして、例えばうみがたりなら、夏休みに小学生無料券をくれる。そうすると親は連れて行かないといけないから、親は入館料を払う。子どもに配布して、親に来てもらう、親からお金をとる、そのようにして増やしていってはどうか。

（市川主任）：令和 2 年度では、「保護者 1 名無料券」、令和 3 年度岩野勇三彫刻展では「保護者 2 名半額券」をそれぞれ市内小学校経由で配布した。

（大塚委員）：入館者を増やすということは、市民から「こういう展覧会がみたい」という要望を聞き取ることも大事だと思う。子ども向けだったらアニメなどの、サブカルチャー。ただ、ここは「小林古径記念美術館」である。展覧会の企画は、どのようにして決めていくのか。

（宮崎館長）：運営委員会のご意見を頂戴することもあるし、来館者アンケートでも意見を徴収している。

⑵ 報告事項「令和３年度の事業内容について」（公開）

（笹川副館長が資料にもとづき説明）

（川崎委員）：無料で入館できる「無料入館日」は年間で何日あるのか

（笹川副館長）：2 月 11 日の「古径生誕記念日」、5 月 18 日の「国際博物館の日」の 2 回。5 月 18 日の国際博物館の日は、令和 3 年度が初めての試みであった。

（川崎委員）：2 月の古径生誕日は、車が駐車できないくらい人がいて驚いた。毎年実施してほしい

（宮崎館長）：「古径生誕日」は恒例にしていきたいと考えている。「国際博物館の日」も、予想以上に来館者が多かった。

（髙橋委員長）：無料だと入館するという事は、潜在的に行ってみたいという人がいらっしゃるということなのか。魅力がなければどんなに安くても来ない。魅力があればどんなに高くても行くだろう。毎回の企画展が「何が何でも行きたい」と思えるようなものになっているかどうか。大変なことだが、魅力を高めていくことが一番大切だ。

（宮崎館長）：世界に目を向けると、ルーブル美術館は平日の夕方（午後 4 時～7 時）は無料で入館できる。その間の入館料をユニクロが支払うという、企業、美術館の Win-Win な連携を行っている。そういう取り組みも模索していきたい。

（髙橋委員長）：条例で実現できないのであれば、条例を直せばいいのであって、市議会議員も反対するような人は誰もいないと思う。それは美術館を作った意義の問題である。多額の費用を投じて作ったのは、入館者を増やすために作ったわけではない。より多くの人に向けて企画展をするのだから、一人に年に 4 回は来てもらう、このことが非常に大事なこと。昔作った条例は今に全く合わない。

（宮崎館長）：年間パスポートを作ったことは、大きな一歩だった。

（髙橋委員長）：どんどん市民を巻き込んでいってほしい。市民が上越にある小林古径記念美術館のことを自慢できるような「私の住む街にはこんな美術館があるのだ」と外に向かって言えるようにしていきたい。同時に、入場者数だけですべてをはからない方がいい。オープン以来、教育普及事業やイベントなど、様々な事業を実施しているので、「美術館ができてよかったね」と言ってもらえるように取り組んでほしい。

（五十嵐副委員長）：年間パスポートについて説明してほしい。

（宮崎館長）：一般 1,500 円で販売している。買ってから 1 年間有効。令和 2 年度は 159 枚販売した。子どもをイベントに参加させたいが、大人は入館料がかかる、というときに年間パスポートがあるとお得だという声も聞かれる。

⑶ 協議事項「令和４年度以降の事業計画について」（非公開）

（市川主任）：最後に宮崎館長が挨拶申し上げる。

（宮崎館長）：様々な会議に参加しているが、この美術館運営委員会は終始和やかで、活発な意見交換ができて大変ありがたい。当館は開館したばかりだが、コロナ禍の中では健闘しているのではないかと思っている。それも美術館運営委員会の皆様からのご支援・ご協力いただいたものが形になったものだと考えている。今日いただいた意見も、一つでも多く実現できるようにしていきたい。今後も引き続きご指導をいただきたい。

（終了）

９　問合せ先

小林古径記念美術館　℡：025-523-8680

E-mail：kokei@city.joetsu.lg.jp

１０　その他

別添の会議資料もあわせてご覧ください。